

★ 8月です。69年前、ヒロシマの原爆により被爆された方が身近にいらっしゃいました。その方のお話を、ご本人のご了解を得て、今日から6日原爆投下の日まで、連載いたします。じっくりとお読みください。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その1～

昭和20年8月6日午前8時15分広島で見た事をお話いたします。

8月5日は深夜に2回空襲警報が発令され、6日の朝も7時過ぎに空襲警報があり、7時30分頃に解除されていたそうです。当日の気温は26.7度で薄曇りの朝だったそうです。

当時仕事は8時始業で、大半の労働者・徴用工・女子挺身隊、および勤労働員された中学上級生（1万数千人）たちは、三菱重工や東洋工業を始めとする数十の軍需工場での作業となったそうです。また建物疎開には、中学下級生（数千人）および一般市民の勤労奉仕隊（母親たち）や病気等の理由により徴兵されなかった男子等が参加していました。動員は市内の他、近隣の農村からも行われました。建物疎開とは、空襲による類焼を食い止めるために建物の間引きを行う作業です。建物の破壊は軍が行い、瓦礫の処理を奉仕隊が行いました。当然、青空の下での作業である為、彼等は原爆の熱線を直接、大量に浴びることになったそうです。尋常小学校の上級生児童は昭和20年4月に行われた集団疎開で市を離れていた者が多かったのですが、下級生児童は市内に留まっていたそうです。

私は、爆心地から約2k近く離れた千田町に家があり、近くに広島大学がありました。そこで、父（35歳）と母（28歳）と住んでいました。昭和17年9月24日生まれの私はもうすぐ3歳でした。7歳上の兄は集団疎開で自宅から約10k離れた郊外の五日市町に住んでいました。

当時、父は新聞記者をしていて、出勤の準備の為2階の階段近くで、窓の外を見ていたそうです。私は1階で母と朝食を食べる寸前で、当時の食卓で遊んでいたそうです。この食卓のお蔭で割れたガラスや、飛んで来た家具から身を守る事ができました。父は窓からの爆風で階段を滑り落ちたそうです。私の家は直ぐに倒壊した訳でなく、その後、火災で焼かれてしまいました。幼児だった私と、両親は火災から逃げる為、爆心地から4k近く離れた江波にいる叔父の家に逃れて行ったそうです。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その2～

幼児だった私は、当時の事を全くと言う程覚えていません。それでも、鮮明に覚えている事は、母の背中で見た、黒焦げの物体が川に沢山浮かんでいた事です。広島は川の町ですから、その物体は爆心地近くで亡くなった多くの人々だったのです。そして、炎天下を逃げて行く私に、どなたかが野球帽と、おむすびを下さった事を覚えています。そして、父方の祖母は爆心地の直ぐ傍で薬屋を営んでいましたが、骨さへ見つかる事なく亡くなりました。

又、東大を出て朝日新聞に勤めていた、母の叔父は、大本営発表の戦争記事を書くのは嫌だと新聞社を辞め、小さな饅頭屋を営んでいましたが、その大叔父も、跡かたなくこの世から消えました。両親から聞いた話では、爆心地の近くで被爆して、命からがら逃げて来て、命尽きた真っ黒な死体や、人間の姿とは思えない、焼けただれた人が息絶え絶えに溢れていたそうです。

後で分かるのですが、この結果、土壌中からストロンチウム 92 や セシウム 137 が大量に検出されたそうで、急性白血病で亡くなった人が多くいたそうです。

原爆の炸裂の高熱により巨大なキノコ雲（原子雲）が生じた。これは爆発による高熱で発生した上昇気流によって巻き上げられた地上の粉塵が上空で拡散したため、特徴的なキノコ形になったものとされる。キノコ雲の到達高度は約、16000メートルに達していたことが判明したそうです。

低高度爆発であったためにキノコ雲は地表に接し、爆心地に強烈な誘導放射能をもたらした。熱気は上空で冷やされ雨となりました。この雨は大量の粉塵・煙を含んでおり、粘り気のある真っ黒な大粒の雨であったそうです。この雨を黒い雨と言われています。この雨は放射性降下物を含んでいたため、雨を浴びた者を被曝させ、土壌や建築物及び河川等を放射能で汚染しました。

当日、広島市上空には南東の風が吹いていたため、キノコ雲は徐々に北北西へ移動しやがて崩壊、日本海方面へ流れていきました。このため市北西部の南北 19 キロメートル×東西 11 キロメートルの楕円形の領域において黒い雨が 1 時間以上強く降り、この雨に直接当たる、あるいはこの雨に当たったものに触れた者は被曝しました。戦後の調査研究で、黒い雨の他、広範囲に放射線の黒い灰状の粉塵が 6 日 15 時頃まで降り、郊外にまで広範に放射能汚染をもたらしていたことが判明しています。所謂 2 次放射能被害者です。

福島原発でスピーディが公開されず、飯館村と同様、何キロと丸く被害が出るのではなく、風向き等でどの方向に行くかわからないと言う事です。幸い私達家族は黒い雨と反対に逃げた為、雨の被害には当たりませんでした。だから、私は今でも生きているのかも知れません。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その3～

原爆投下後、被爆者の救援活動等のため、広島市外より広島市に入市し、誘導放射能等により被曝した者を「入市被ばく者」といいます。規定では、原爆投下後2週間以内に爆心より約2キロ以内の区域に立ち入った者が入市被ばく者とされている。原爆投下当日、爆心地へ入り数時間滞在した者は約0.2シーベルト、翌日に入った者は約0.1シーベルトの被曝をしたと言われてい

ます。

広島は川の町です。多くの雨は川から海に流れて行きました。

それから先の記憶は、兄が疎開していた広島から約10K離れた、五日市と言う町に移り住んでからの事です。最初は農家の離れの様な所に住み、次に一軒家を借りて、そこから幼稚園、小学校3年生まで通いました。そして小さな家を建てて暮らしました。父は広島市内の新聞社に通っていました。日本の敗戦から5年後の昭和25年に朝鮮戦争が始まり、日本は特需に沸いていました。多くのバラック小屋も段々なくなり、原爆の後が少しずつ無くなって行きました。

今の福島と違うのは、沖縄を始め日本全国、皆被災者でしたし、同級生の中にも戦争で父親を亡くした人も多くいましたから、自分達だけが取り残されたと言う気持ちが無く、とにかく戦争が終わり、平和に暮らせる事に幸せを感じていたのかも知れません。

被爆から10年経った昭和30年頃から、父も母も健康を害する事が多くなりました。考えて見れば、父は毎日爆心地近くの新聞社に通勤していましたし、母も、よく広島に行っていました。

そして私は女子ばかりの中学に入学しました。そこで「あの人の傍に行くとうつるよ」と苛められる様になりました。その頃「原爆症は感染する」と、今で言う風評被害の様な物が流れていたからです。

父は「原爆に遭った事は人に言わない様に。広島から約20K離れた、呉と言う市に住んでいた母方の祖母の家

吐いて死にました。その年の11月、風邪をこじらせて寝ていた父は、友人の軍医上がりの医者の往診を受けた後、祖母が見に行くと死んでいました。今で言う医療ミスではないかと言う人もいましたが、心臓麻痺という事でした。父も母も被爆による影響だと分かっていたのだとは思いますが、認めなく無かったのかも知れません。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その4～

当時、兄は京都の大学に行って居た為、私は祖母と共に、宇都宮に住んでいた母の弟の家から高校に行きました。その後20歳になった時、今度は私が結核に罹り2年間の入院生活を送りました。

その後、広島で兄夫婦と暮らしていました。そして東京生まれの主人と知り合いました。原爆の悲惨さを話して、子供はつくらないからと言っても、あまりピンと来なかったらしく、結局、結婚する事になりました。

子供はつくらないつもりでした。それは、1950年代、白血病は治療法のない代表的な不治の病の一つであり、発症者の多くが命を落とした。原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さんは被爆時3歳で、傷一つなく元気に育っていましたが、12歳で白血病のために亡くなっています。私は、元気でも先はわからないと常々思っていたからです。主人は、時々、冗談にまだ生きているの?と言います。

29歳になった時、子供が出来てしまいました。さんざん悩みました。それは原爆の恐ろしさは人間の遺伝子に一番影響して、一度傷ついた遺伝子は回復する事なく、2代、3代と受け継がれていく。特に被爆者同士の結婚により、生まれた子供に影響が多いと聞かされていたからです。主人は被爆者では有りませんが、所謂被爆2世と言われる子供を産む事が怖かったからです。

年齢的にも子供を産むタイムリミットでしたし、結局産む決心をしました。しかし8か月の時、酷い妊娠中毒に罹り、入院して子供を産みました。2800gの小さな男の子でした。新生児室で見た我が子は他の赤ちゃんと違い紫色をしていました。チアノーゼを起こしていたのです。お医者さんから聞かされた事は「心臓にかすかに欠陥がある。普通、胎児は母親のお腹の中では心臓に穴があるが、生まれると同時に完全に穴は塞がれるそうです。様子を見るが、小学校に入るまでに穴が塞がれない場合は手術をする」と言われました。本当に体の弱い子供で病院に

一週間行かないと、お医者さんの方が心配される位でした。直ぐ、ひきつけを起こし、何度も救急車のお世話になりました。今回の福島被害でも、甲状腺の異常と共に心臓への影響が危惧されています。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その5～

同じ頃、友人に女の子が生まれました。彼女もご主人も原爆に遭っていて、未熟児で生まれた子供は目の無い子だったのです。被爆との関連はわかりませんがこれを聞いた時、私には、流石に二人目を産む勇氣はありませんでした。

幸い息子は自然に心臓の穴はふさがり、手術をする事なく41才になりました。息子に子供は居ません。所謂、原爆2世の子供です。原爆は生殖細胞を傷つけると言われています。その為なのか、子供の時に病気の治療につかった、強い薬の後遺症かはわかりません。嫁も息子もどちらに問題が有るか等、詮索しないで子供のいない生活を楽しむと言っています。

私は子供の頃、父に聞いた話をいつも思い出します。「お父さんはドイツが5月に無条件降伏をした時、日本も戦争が終わると思っていた。アメリカで新型爆弾が出来、それを使われたら、日本は終わりだから、ドイツはわかっていたのだと思う。残念ながら軍部の一部が敗戦を認めなくて、決断が出来なかった。初めから勝てる戦争では無かった。負け戦を勝ち戦の様に報道した新聞も悪い。お父さんも戦犯の1人だよ」と

そもそも、一部の特権階級の為に戦争するなんて馬鹿げた事です。早くポツダム宣言を受諾して無条件降伏をしていれば、沖縄も広島も、長崎も無かったのです。ましてや、戦争の為に300万人の人が犠牲になる事は無かったと思います。

今、日本は、福島原発事故と、憲法問題で揺れています。まるで、あの太平洋戦争の大本営発表の様に、中国や北朝鮮、韓国との軋轢ばかりを報道して、危機感煽ってばかりいます。

福島原発事故についても、安倍さんがオリンピック招致の為に嘘の為に辻褃あわせに躍起になっています。国民は真実を知らされない儘、復興そっちのけで、東京へ、復興財源を使うのだと思います。

昭和26年に書かれた「原爆の子」の中で広島大学の長田新と言う教授が新憲法についてこう語っています。

「日本国民はポツダム宣言を受諾し、今までの軍国日本が人類に対していかに戦争の惨禍と不幸とを与えたかを懺悔し、未だかつて世界にない全面的な戦争の放棄と徹底的な永久平和を主張する新憲法を、議会を通じて決定した。この様にして今や日本国憲法は国民の理想であると共に、国民の悲願となったのである。あの聖書の中にある「神は地の果てまでも戦をやめしめ、弓を折り、槍を断ち、戦車を火にて焼き給う」と言うキリスト教の絶対平和の精神を、今や欧米の何れのキリスト教国でもなくて、人類史上はじめて吾日本国憲法に雄々しくしくも厳然として現れたのである。

今まで語りたく無かった原爆体験 ～その6～

しかしながら、国連原子力委員会の代表エヴェアト博士は「原子力発電によって、普通の電力源に恵まれない地域に、近代社会を繁栄させる事が出来るだろう。原子力の平和的使用が、より直接的な需要性をもつ国々は、できるだけ早い時期にかかる原料を入手し、かつ平和目的の為に原子力を開発する必要な科学的情報を得たいと要求するだろう」

この本でも、「原子力は戦争に悪用されたけれど、平和の為に利用される様になれば良い」と被爆した子供達も作文に多く書いています。

原子力の平和利用という言葉に騙された事がチェルノブイリであり、福島原発の悲劇を生んだのだと思います。

そして日本の政府や国民は、福島から目をそむけ、もう一つの誇り、平和憲法も葬りさろうとしています。ドイツのメルケル首相は福島原発を受けて、直ぐに原発ゼロへと切り替えました。隣のフランスは原発輸出国です。だからと言って、両国間に対立が生まれている訳では有りません。

しかし原発事故を起こした当事国の総理は、ODAと言う甘い飴を配りながら、原発を売り、武器輸出の出来る国にしました。ドイツはナチスの大罪を認め、戦後処理をしました。日本は何時までもくすぶった儘です。ドイツは赤字国債の発行はしなくて済むそうです。赤字を膨らませ

ながらODAや軍事を膨らませて行く安倍政権とは何なのでしょう？「税と福祉の一体改革」の三党合意の福祉の部分はどこに行ったのでしょうか？

★ 原爆と原発の大きな違い

広島の場合、800グラムのウランが核分裂を起こしたと言われていますが、原発では一基で一日3キログラムのウランが使用されています。東京電力の資料によると、福島原発は1号機に69トン、2号機に94トン、3号機に94トン、4号機に94トンのウランがあります。

また、原爆の放射能は爆発と同時に高い熱による上昇気流で、殆どの放射能が成層圏まで行き、その地域に降ってくるのは極僅かと考えられます。爆発後に被曝した人の多くは、その後、放射能を含んだ黒い雨と、中性子線で放射化した物質から被曝した人達ですが、量も小さい上に、放射化した放射能は数ヶ月から数年で消えます。

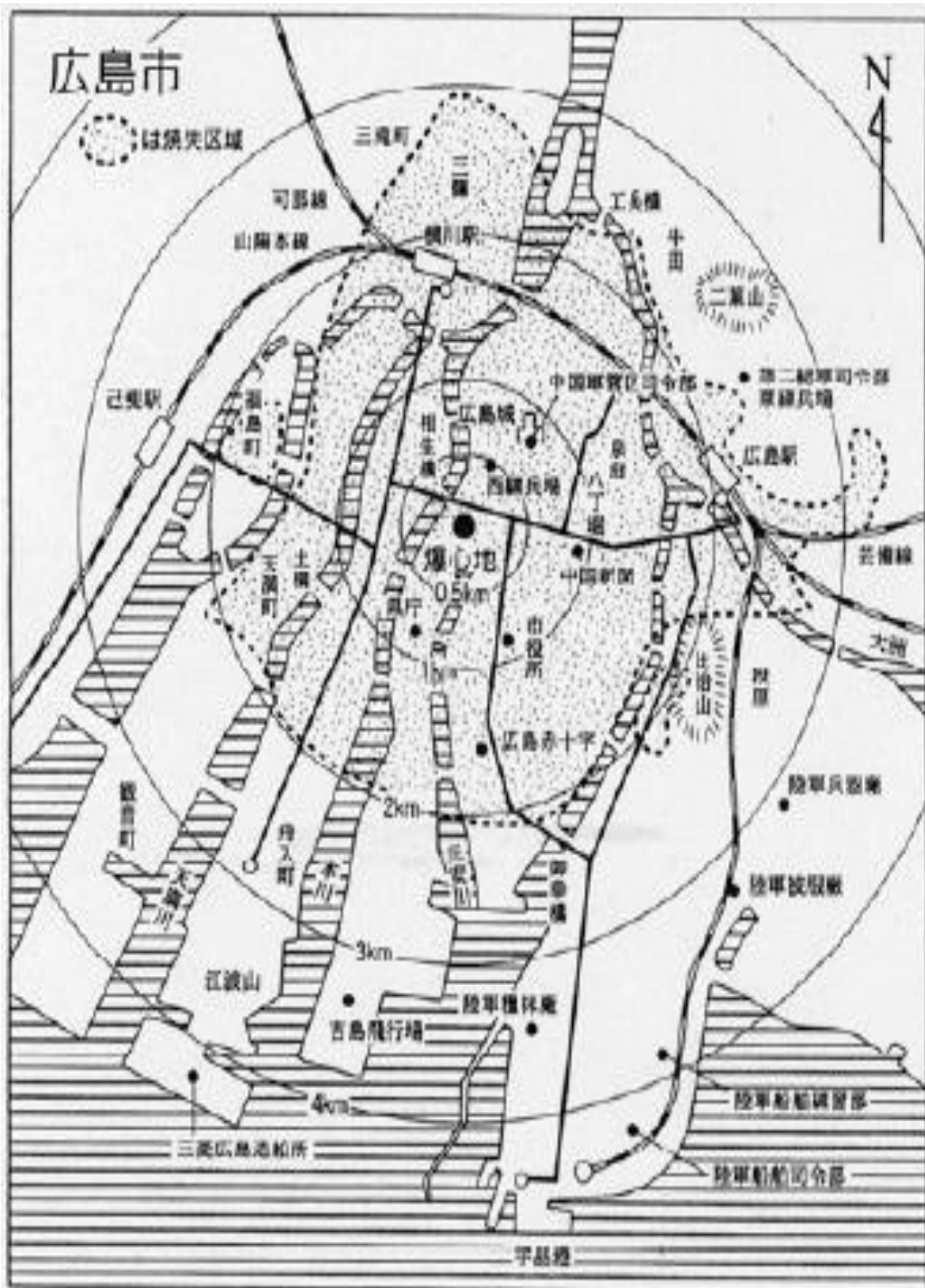
その僅かな放射能と短期間の被曝でさえ、何十年にも渡り多くの被爆者を苦しめています。しかし、原発の抱える放射能はまるで桁違いに大きなものです。

アメリカの学者の中には「福島の四号機が事故を起こしたら、自分の家族は南半球に移住させる」と言う人もいるくらいで、アメリカのマスコミはそれを報じています。

福島原発が爆発した時、アメリカは80km圏外への避難という楽観的なものでしたが、他の国の多くは国外退去でした。

原爆は1発で都市を破壊しましたが、原発はもっと広い範囲を廃墟にします。日本国民は、沖縄を捨てた様に、福島も無かった事にしています。全くと言う程、福島の報道は無くなりました。酷暑の時も厳寒の中で作業している、多くの下請けの作業員の方々を思いやる気持ちも無くしています。カビだらけの仮設住宅の事も殆ど報道しません。

結局、広島、長崎は原子力の平和利用と言う、隠れ蓑にされたのかも知れません。



参考文書

原発に依る死亡者

爆心地から 500 メートル以内での被爆者では、即死および即日死の死亡率が約 90 パーセントを越え、500 メートルから 1 キロメートル以内での被爆者では、即死および即日死の死亡率が約 60 から 70 パーセントに及んだ。さらに生き残った者も 7 日目までに約半数が死亡、次の 7 日間でさらに 25 パーセントが死亡していった。

11 月までの集計では、爆心地から 500 メートル以内での被爆者は 98 から 99 パーセントが死亡し、500 メートルから 1 キロメートル以内での被爆者では、約 90 パーセントが死亡した。[1945 年\(昭和 20 年\)の 8 月](#)から [12 月](#)の間の被爆死亡者は、9 万人ないし 12 万人と推定されている。尚、数十名いた米軍捕虜も全員死亡した。

9 日、陸軍省広島災害調査班が[日本赤十字](#)広島赤十字病院の地下室でレントゲンフィルムが全て感光していることを確認、直ちに陸軍軍医学校に放射線専門家の派遣を要請している。これを受けた陸軍軍医学校は、陸軍軍医学校レントゲン教官である御園生圭輔軍医及び[理化学研究所](#)の研究者玉木英彦研究員・村地孝一研究員・木村一治研究員らを派遣して残留放射能測定や被爆者の血液検査等を行った。この結果、土壌中から[ストロンチウム 92](#)や[セシウム 137](#)が大量に検出され、白血球の減少している被爆者が多いことがわかった。後に遺体病理解剖にて被爆者を蝕んだ放射線は[α線](#)、[γ線](#)、[β線](#)、[中性子線](#)である事が判明した。

黒い雨・2次被害

原爆の炸裂の高熱により巨大な[キノコ雲](#)(原子雲)が生じた。これは爆発による高熱で発生した上昇気流によって巻き上げられた地上の粉塵が上空で拡散したため、特徴的な[キノコ](#)形になったものとされる。キノコ雲の到達高度は従来約 8000 メートルだとされてきたが、米軍機が撮影した写真を基に測定したところ、実に二倍の約 16000 メートルに達していたことが判明した[\[30\]](#)。

低高度爆発であったためにキノコ雲は地表に接し、爆心地に強烈な誘導放射能をもたらした。熱気は上空で冷やされ[雨](#)となった。この雨は大量の粉塵・煙を含んでおり、粘り気のある真っ黒な大粒の雨であった。この雨を[黒い雨](#)という。この雨は[放射性降下物](#)を含んでいたため、雨を浴びた者を[被曝](#)させ、土壌や建築物及び河川等を放射能で汚染した

当日、広島市上空には[南東の風](#)が吹いていたため、キノコ雲は徐々に[北北西](#)へ移動しやがて崩壊、[日本海方面](#)へ流れていった。このため市北西部の[南北 19 キロメートル×東西 11 キロメートルの楕円形](#)の領域において黒い雨が[1 時間以上強く降り](#)、この雨に直接当たる、あるいはこの雨に当たっ

たものに触れた者は被曝した。戦後の調査研究で、黒い雨の他、広範囲に放射性的の黒い灰状の粉塵が6日15時頃まで降り、郊外にまで広範に放射能汚染をもたらしていたことが判明している。

なお、放射性核分裂生成物、核爆発時に生じた大量の中性子線による誘導放射能等により被曝した者を「二次被曝者」という。上述、郊外の黒い雨による放射線被曝者も二次被曝者になる。

原爆投下後、被曝者の救援活動等のため、広島市外より広島市に入市し、誘導放射能等により被曝した者を「入市被ばく者」という。規定では、原爆投下後2週間以内に爆心より約2キロ以内の区域に立ち入った者が入市被ばく者とされている。原爆投下当日、爆心地へ入り数時間滞在した者は約0.2シーベルト、翌日に入った者は約0.1シーベルトの被曝をした。

その他、被災地域より避難してきた被曝者の放射能汚染された衣類や頭髮に触れて被曝した者も多くいた。当時は放射能や放射線の性質、その危険性を知る者が、物理学者やごく一部の軍関係者、医療関係者程度であったことが影響した。

長期的影響

熱傷・ケロイド

1キロメートル以内で被曝した者は高度から中度の熱傷が生じたが、2キロメートル以遠で被曝した者は軽度の熱傷にとどまり、治癒に要した期間も短かった。しかし、3-4ヶ月経過後、熱傷を受けて一旦平癒した部分に異変が生じ始めた。熱傷部の組織の自己修復が過剰に起こり、不規則に皮膚面が隆起し、いわゆるケロイドを生じた。ケロイドは外科手術により切除を試みても、しばしば再発した。

放射線症

大量の放射線を浴びた被曝者は、高確率で白血病を発症した。なお被曝者の発症のピークは1951年、1952年であり、その後は徐々に下がっている。広島市の被曝者では慢性骨髄性白血病が多く、白血病発症率は被曝線量にほぼ比例している。また若年被曝者ほど発症時期が早かった。発症すると、白血球が異常に増加し、逆に赤血球等の他の血液細胞が減少して障害をまねく。さらに白血球の機能も失っていく。

1950年代、白血病は治療法のない代表的な不治の病の一つであり、発症者の多くが命を落とした。原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子は、12歳で白血病のために亡くなっている。

以降は癌の発症が増加した。[転移](#)ではなく、[繰り返して多臓器に癌を発症する例がしばしば見られる](#)。これら[被爆者の遺伝子には異常](#)が見られることが多い。放射線などにより回復不能にまで損傷を受けた [DNA](#) は、[翻訳](#)を介し、癌の発病を招くこともあるため、これら被爆者が「原爆により癌を発症した」と主張することも理にかなっている。[\[注 21\]](#)。

心的外傷ストレス障害等

[原爆の手記](#)を分析した結果によると、被爆者の3人に1人が罪の意識(自分だけが助かった、他者を助けられなかった、水を求めている人に応えてあげられなかった等々)を持っていることが判明している(一橋大石田による調査)。(参照:[サバイバーズ・ギルト](#)、[心的外傷後ストレス障害](#))

精神的影響は、原爆によって直接もたらされた、サバイバーズ・ギルト、心的外傷後ストレス障害だけではない。戦後のGHQによる原爆報道統制が日本国民の間に「被爆者差別」を生み、被爆者はこれにも長く苦しむことになった。すなわち原爆、放射能、放射線に関する情報不足より、日本国民の間に「被爆者差別」が生まれた。戦後しばらくの間、新聞・雑誌などにおいても被爆者は「放射能をうつす存在」あるいは重い火傷の跡から「奇異の対象」などとして扱われることがあり、被爆者に対する偏見・差別は多くあった。これらは被爆者の生活に深刻な影響を与えた。昭和30年代、例えば他の都道府県で就職の際、「広島出身」と申告すると「ピカ(原爆)を受けたのか？」と訊かれるのは常であり、被爆の事実を申告したら、仕事に就けないことが多くあった。このため少なからず被爆者は自身が被爆した事実を隠して暮らさざるを得なくなり、精神的に永く苦しめられることになった。原爆のことを「ピカドン」とも言うが、転じて「ピカ」は被爆者を示す差別語ともなっていた。

[次世代への影響](#)

[胎内被爆](#)

母親の胎内で被爆することを胎内被爆という。[胎内被爆](#)により、[小頭症](#)を発症する者がいた。小頭症とは同年齢者の標準より頭囲が2倍以上小さい場合を言う。脳の発育遅延を伴う。諸説あるが、被爆時に胎齢3週 - 17週の胎内被爆者に多く発症した。脳のみならず、身体にも発育遅延が認められ、これらが致命的であるものは、成人前に死亡した

原爆二世の白血病後発勝率

「公式見解」では被爆二世、被爆三世については、永年にわたり健康への影響、すなわち遺伝的影響はないとされてきた。[放射線影響研究所](#)は2007年に、被爆二世への遺伝的な影響は、死産や奇形、染色体異常の頻度、生活習慣病を含め認められないと発表した[\[35\]\[36\]](#)。

一方で、日本国政府などの公式見解となる放射線影響研究所などの発表には以前より疑問の声が多くあり、各大学などでの調査・研究が続けられていた。2012年6月3日、[長崎原爆資料館](#)で開催された第53回原子爆弾後障害研究会、[広島大学の鎌田七男名誉教授](#)らによる「広島原爆被爆者の子どもにおける白血病発生について」の研究結果発表では、広島大学原爆放射線医科学研究所研究グループの長期調査結果報告において、被爆二世の白血病発症率が高く、特に両親ともに被爆者の場合に白血病発症率が高いことが、50年に渡る緻密な臨床統計結果より示され、少なくとも被爆二世については遺伝的な影響を否定できないと結論付けた。鎌田は「これでようやく端緒についた。」と語っている

